

2-2					
主題	利用者が希望する排泄方法の実現に向けて 指針に基づき取り組んだ結果、QOLが向上した事例				
副題	利用者の希望は介護福祉士のエッセンス				
キーワード 1	指針	キーワード 2	QOLの向上	研究(実践)期間	42カ月

法人名・事業所名	社福) 台東区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム三ノ輪
発表者(職種)	稗田寿実香(介護職員)、石塚智輝(介護職員)
共同研究(実践)者	濱本美幸(介護主任)、小野田祐也(生活相談員)

電話	03-5603-2231	FAX	03-5603-2232
----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	特別養護老人ホーム三ノ輪は、平成6年に開設した入所定員63名、短期入所4名の従来型の特養です。従来の日課による画一的なサービスを変革し、一人ひとりの生活欲求に寄り添って対応する為に、平成15年度より「寄り添うケア」を掲げ「自宅と同じ生活を送って頂く」という考えの下、日々励んでいます。
-------	--

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

本実践では当施設の「寄り添うケア」の排泄指針である・自然な排泄を促す・プライバシーを尊重し、1人ひとりに寄り添った援助を提供する・ADLが変化した際には、適切な援助方法であるかを検討する。以上3つの指針に基づき取り組んだ。

入院や加齢によるADLの低下に伴い、自立での排泄やトイレ誘導が困難になった利用者が平成27年10%から平成28年15%に増加した。その結果、皮膚トラブルやトイレを我慢してしまう等の身体への悪影響や、QOLが低下してしまう利用者が見られるようになってきた。しかし、職員間でQOLの向上に取り組むことへの認識に、ばらつきが見られていた。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

- ・トイレでの排泄を希望している利用者が全体で48%であるため、排泄ケアの見直しを通して「寄り添うケア」の指針に基づいていなかったことを認識し、再度実践することが利用者のQOLの向上に繋がると期待した。
- ・①入院によるADLの低下、②加齢によるADLの低下が見られる利用者を対象とし、指針に基づいて個々の状態に沿った排泄ケアを計画して、実施する。

《3. 具体的な取り組みの内容》

①入院によるADLの低下の場合。

「多職種と連携してトイレを自立に戻す取り組み」

Aさん(80代、介護度2)車椅子自走。入院によるADLの低下に伴いオムツ着用となる。トイレでの自立動作が行えなくなり、身体への悪影響や本人の不満が見られるようになる。

- ・排泄：オムツの使用を中止し、綿パンツに変更した。
- ・リハビリ：フロア内でも行えるリハビリを実施し、1カ月毎に理学療法士の評価を受けた。

・モニタリング：実際のトイレの動作のモニタリングを1週間実施。

②加齢によるADLの低下の場合

「アセスメントから支援方法の見直し」

Bさん（90代、介護度5）車椅子全介助。トイレへの意欲があり誘導することで排尿が見られる為、二人介助にてトイレへ誘導していたが立位が取れず、本人と介護職員の身体的負担がかかる事や本人に話が伝わらない事も増え、大声で不安を訴えるようになった。また、失禁回数が増加し介護職員からオムツ交換も視野に入れてはどうかと声上がる。

- ・アセスメント：家族から昔の生活習慣を聞きとる。
- ・統計：過去1カ月分の排泄状況の統計を取り、誘導する時間の見直しを実施。
- ・対応方法の共通化：本人が納得してから介助に入る、排泄後トイレから立つ前に清拭しておく、ズボンは膝上まで上げておく事を再周知した。

《4. 取り組みの結果》

①Aさんの状況の変化として以下3つが得られた。

- ・ADLは向上し、自立での排泄が可能となった。
- ・皮膚トラブルが完治した。
- ・水分摂取量が増加したため、1カ月の下剤の服用回数が14回から1回まで減少した。

②Bさんの状況の変化として以下4つが得られた。

- ・トイレの希望が強い理由を共通認識し、本人の希望を尊重してトイレへの誘導を継続した。
- ・排泄が確実に見られるようになり、1カ月の失禁回数は37回から1回まで減少した。
- ・声掛けを工夫することで不安の訴えも減少したと、多数の介護職員から確認された。
- ・抱えている時間が42秒から8秒に短縮され、本人と介護職員の身体的負担が軽減した。

また2つの事例を通して、利用者とマンツーマンで接する時間の必要性や適切な声掛け、基本のケア方法を見つめ直すきっかけになる等、介護職員の変化が得られた。

《5. 考察、まとめ》

介護職員の技術のばらつきや、業務の慣れ等により当施設にある「寄り添うケア」への意識が薄まり、利用者に寄り添うことが出来ていなかった結果、ADLやQOLの低下の一助となっていた。本実践で「寄り添うケア」への意識が薄れていたことを共通認識し、目新しいものに頼るのではなく、専門職である介護職員が利用者の希望を汲み取り行動することで、利用者のADLやQOLの向上に繋がった。今後の課題として、より多くの利用者の希望に寄り添うために、定期的に「寄り添うケア」を組織が統制をとって全職種に発信することが必要である。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

「日中オムツゼロ」の排泄ケア(2016年)高頭晃紀、竹内孝仁、メディカ出版
介護福祉士の「専門性」を問い直す(2018年)黒澤貞夫、中央法規出版

《8. 提案と発信》

利用者と一番多く関わっている介護職員が、より良い生活が送れるよう常に考え、個々の希望や状況を把握していることが大切である。利用者の満足を追及することが職員のやりがいにも繋がると考える。